茶道の点前における「型」と「ずれ」

木村大治

1. はじめに

わが国の伝統的な芸道である茶道においては，参与者（亭主・客）は厳密に定められた規矩作法に従わねばならない．またそこで交わされる会話も「たいへん結構なお点前[1]で…」といった定型的なものである．このため，茶道はしばしば「冗長な手続きの連続だ」と評されることがある．たとえば，夏目漱石の『草枕』には「あんな煩瑣な規則のうちに雅味があるなら，麻布の聯隊のなかは雅味で鼻がつかえるだろう．廻れ右，前への連中はことごとく大茶人でなくてはならぬ」と書かれている．

もしも規矩作法に厳密に従うこと，つまり定型性が茶道における究極の目的であるならば，毎回まったく同じ動作をおこなう，ロボットのような点前が一番いいことになるが，それは茶道の実践者の直感にはまったく反している．実際，多くの人が，定型的であるはずの茶道に魅力を感じて稽古しているし，そこに芸道や禅と関連した深い哲学性も見出されているのである[2]．そこではいったい何が起こっており，茶道を含めた伝統芸能で重視される「型」（源 1992）とはどういう意味を持っているのか．

こういった問いは，近代的コミュニケーション観を転換する契機となる可能性を秘めている．なぜなら，定型性に対する否定的な評価は，通常流布しているコミュニケーション観の具現としての，シャノンの情報理論をじかに適用したものだと言えるからである．シャノンの「情報量」とは，「意外さ」「新規さ」を数値化したものであり，「同じことを繰り返す」ところには意外性は何もないのである．

私は，このような着眼のもとに，「茶道の相互行為論 ―茶席における会話と所作の分析から」というテーマで科学研究費を獲得し，研究を進めている．定型性に関しては，さまざまな議論の切り口があるが，本発表では，定型とそれからの「ずれ」に着目して議論を進める[3]．

2. 対象と方法

研究においては，茶席，あるいは点前稽古の場で生起する会話および身体動作を，360 度ビデオカメラやアクションカメラで記録し，その微視的な分析をおこなっている（図 1）．もともとの計画では，大学茶道部の学生諸君に協力を求め，初心者が点前に習熟していく過程を追っていく予定であったが，現在コロナ禍でサークル活動ができなくなっており，この種のデータはまったく取れてない状態である．そこで今回は次善の策として，発表者本人が

[1] 「点前」とは茶道の用語で，茶を点てる作法のことである．
[2] 茶道は総合芸術と言われるように，さまざまな方向から分析することが可能である．たとえば，谷川（1977）は「芸術的なもの・社交的なもの・儀礼的なもの・修行的なもの」の四要素からなる三角錐モデルを用いて分析を試みている．
[3] 茶道の所作に着目した研究には，たとえば中西（2003）があるが，本発表のように，差異に着目したものではない．

参加している点前稽古において，自分自身の稽古の場面を撮影し，分析に供する．

分析した稽古は，木村が出席している，月 1 回の割合でおこなわれる点前稽古である．稽古は毎月一度，午後 2 時から 4 時間ほどおこなわれ，毎回 6 人前後の参加者がある．流派は裏千家で，教えるのはこの稽古で十年以上にわたって指導を続けている，ベテランの茶道教授（女性）である．私自身は，大学時代に茶道部に所属しており，その頃は熱心に点前稽古をしたが，その後数十年にわたって点前をしたことがなく，最近になってはじめて，稽古を再開したばかりである．

図 1 360 度カメラで撮影した稽古の様子。左が点前する木村。

3. データと分析

まだそれほど多くの場面を分析したわけではないが，先生の教示はとりあえず以下のように分類できる．

- お茶の心構え，哲学

生徒 1：お客さんの練習もしないとだめなんですかね

先生：お客さんはね，お客さんでやっぱり席というのは回っていくからね，亭主はもちろんこう，ちゃんとできないかんねんけども，まあひとりよがりで進んでいったら面白くないしね，やっぱり客とのこの，雰囲気っていうのかなあ，阿吽の呼吸みたいなもんがね．

- 百科全書的知識の教授　（席中の茶碗，釜，花，掛け軸等々に関する説明）

先生：（柄杓を）ここ（釜の縁）に掛けましょう．うばぐち，うばが餅と一緒なんですよ，うばぐちといってね，歯の抜けたおばあさんみたいな．て，いうふうに言われるのね．ちょっと落ちてる，ここから．普通こう上がってるでしょ，こやってね，これ下がってる，縁が．

- 具体的な動作の指示　（下で詳しく分析する）

以下に，具体的な動作の指示のトランスクリプションを示す．

①

木村：（水指の運び出し）

先生: はい，腰からずうっと．はい，いいです．そう．

②

木村: （帛紗捌き）

先生: そのとき手の甲水平にする．もっと，そう．はい．　その脇が卵一個ぐらい．

③

木村: （お茶を点てるお湯を汲む取り柄杓）

先生: 今のところもう一回やってみて．もったいない．せっかく上手に取ってはるから，指をちゃんと揃えて．で，すーっと右へ．そうそうそういう感じ．はい．で，できればね，人差し指だけ親指と伸ばして，あとは三本は丸．

④

木村: （お茶を点てるお湯を茶碗に入れたあとの切り柄杓）

先生: はい，そう．そのときね，残念なの，ちょっと指が開いてる．このね，ここで決めるとこなん．なんかやっぱりこう指がピッとくっついてると，もっときれいに見える．

木村: はい

先生: あの，一説には武士が弓，弓をね，放ったと言われているから，やっぱここはぴしっと決め，決め hh たいとこなんでちょっと

生徒 2: 何か，外国のね，あの留学生みたいな子にちょっと教えるときに，盆略より，これがやりたい，ねえみんな，これ難しいから，この，いいじゃないって言ったら，これやりたいって…

（全員笑い）

これらのトランスクリプションに見られるように，先生は，初心者の流れがちな楽な動作から外れた動きをせよ，と指示している．たとえば，①において重い水指を運ぶときは，「どっこいしょ」といった具合に置くのが人間にとって自然なやり方だろうが，それを「腰からずうっと」といったように，その重さを感じさせないような動きをすることがオノマトペを用いながら指示されている．②においては，帛紗捌きにおいて肘を張って動作することが要求されている[4]し，③，④においては柄杓の扱いにおいて，指を揃えることが求められている（④ではそれが，弓を放つ「かっこいい」動作になぞらえられている）．これらは日常とは異なる，ある種の緊張を持ってなされる動作だが[5]，うまくそれをやるならば，そこから美しさ，メリハリ，といったものが生じてくるのである．

また，今回提示したトランスクリプションには現れてないが，私自身の経験した大学茶道部の稽古では，定型的であるはずの手前を見ていると，「その人らしさ」といったものが，日常接しているよりもはるかに強く感じられた．おそらくこれは茶道の稽古においては普通にあることだろうが，この現象も，個々人の点前の微細な差異の中にこそ，その人の日常的な所作には現れない特徴が見えてくることを示している．

4. 考察

上記のように，茶道における「楽しみ」の一端は，定型的な所作すなわち「型」の中に現れてくるさまざまな差異をめぐってのものであると考えられる．差異とは定型があってはじめて現れてくるものだから，「型」とはその意

[4] 帛紗捌きにおいて「脇の下に卵を一個入れたつもりで」というのは初心者に対してよく言われる教示である．
[5] 「重いものは軽く，軽いものは重く扱え」という教示も一般的である．

味において必須のものであると言えるだろう[6].

茶道の初学者は，茶席において守らなければならない膨大な定型性や束縛と出会って，「何でこんなことをしなければならないのだろう」と疑問を持つのが普通である．しかしやがて定型性を身につけていく過程で，ある水準まで達したときに，「差異を楽しむ」ことができるようになると考えられる．つまり，定型性は「束縛される」ものではなく，むしろ「それを使って遊ぶ」ものだということに気づくのである[7].

このことは，ベイトソンの論じる「論理階型」の概念を用いて，「学習の論理階型を一段上がる」と形容することができるだろう．ベイトソンはイルカの学習の研究において、この概念にかかわる印象的な事例を提示している（ベイトソン 2000）．イルカには「水面上に顔を出す」「尾ビレで水面を叩く」といった動作を学習させることができるが，ベイトソンは，個々の動作（メンバー）ではなく、それらの動作全体（クラス）にかかわる学習をさせることを試みる．つまり、「前の動作と違う動作をする」ときのみ報酬が与えられるのである．これは、個々の動作の学習よりも一段，論理階型が上がった課題だと言えるだろう．ベイトソンの以下の記述は感動的である.

> 演技の初回から 14 回目までは、不毛な結果が続いたということ．そのあいだ中イルカは前回強化された行動をやみくもに繰り返すだけだった．その間にとられた別の行動は「偶然」の産物と判断される．ところが 14 回目が終わった中休みのあいだ、イルカは明らかに興奮のようすを示した．そして 15 回目の舞台に現れるや、八種類の際立った行動を含む精妙な演技を披露したのである．そのうち四つはまったく新しいもので、この種のイルカにはそれまで観察されたことのないものだった．（邦訳 p.380）

イルカは，「これ」「この動作」にこだわっていたが，15 回目に「これじゃないもの」（他との関係性）という概念に気づいたのである．ここでイルカは、論理階型の段差を突破したわけだが、そこでは強い興奮と喜びが引き起こされている．この，イルカが感じたのと同種の喜びが，「規矩作法に従うこと，使われること」から，「それを使って差異に遊ぶ」ことへの転換において見られるのだと考えられる．そしてその延長上に，茶道の持つ宗教性を予感することができるかもしれない.

参考文献

ベイトソン G. (2000)． 精神の生態学 改訂第２版 佐藤良明訳，思索社

木村大治 (2020)． 杉島敬志編『コミュニケーション的存在論の人類学』書評 アジア・アフリカ地域研究 20-1：161－165.

源了圓 (1992)． 型と日本文化 創文社

中西晴子 (2003)． 茶道の所作 －社会学的考察－ 仏教大学大学院紀要 第 31 号

田中葉子 (2002)． 茶道における「型」のゆくえ ～志向されつつ遠ざかるもの～ 京都大学総合人間学部 卒業論文

谷川徹三 (1977)． 茶の美学 淡交社

6 田中 (2002) もこれに近い考察をしている.

7 私は以前，「『ルール』の『プレイ』への転換」という言い方でこの現象を論じたことがある（木村 2020).